

## アイリン・ライザー宣教師のキリスト教教育 －戦前期における米国長老教会報告書の分析から－

Christian Education of Anna Irene Reiser

－From an Analysis of Her Correspondence to Presbyterian Church in USA in the Prewar Period－

熊 田 凡 子<sup>\*1</sup>、辻 直 人<sup>\*2</sup>

### 要旨

本稿は、米国長老教会宣教師アイリン・ライザーの残した報告書の分析を通し、戦前期に北陸で行われていたキリスト教教育の実態及びライザーのキリスト教教育観について考察した。1920年の来日当初から女学校や幼稚園等のキリスト教教育を実践したライザーは、個々の存在をありのままに尊重し、丁寧に向き合う教育を大事にしていた。ライザーの幼児教育及び女子教育の営みが起点となって、伝道困難な北陸の地においてキリスト教教育が根付き、戦後のキリスト教教育の継続と北陸学院保育短期大学の設立につながっていったのであろう。

**キーワード：**ライザー(Anna Irene Reiser)/キリスト教教育(christian education)/女子教育(girls' school education)/幼児教育(infant education)/宣教活動(missionary work)

### 1. 研究の課題

北陸学院は130年にわたって北陸の地でキリスト教教育・保育に取り組んできた。その歩みを中心になって支えてきたのは、米国長老教会女性宣教師たちである。彼女らが果たした役割が大きいことは、北陸学院発行の年史の中で、各時代において断片的に述べられている。

中でも、アイリン・ライザーは1920年に来日以来、戦時下は一時帰国したものの、戦後いち早く金沢に再来日し、約30年の長期に渡って北陸学院の教育・保育を充実させてきた人物である。

ライザーについては、これまで『北陸学院百年史』<sup>1</sup>をはじめ、「学院史」等の中では、戦前期の北陸女学校及び幼稚園でなし得た活動は述べているものの、具体的な出来事や背景は語られず、戦後1950年に北陸学院保育短期大学を開学する際、

アメリカ諸教会からの募金を集め寄附したことや、帰国直前の1955年に第五等瑞宝章を受章したことなどが取り上げられている。教育上の具体的な貢献内容やライザー自身の教育観については断片的なままで、十分な検討がされていない。同様に、北陸女学校前身の金沢女学校についても、番匠育子「創設期の金沢女学校とアメリカの Western Female Seminary」(甲南女子大学大学院文学研究科教育学論集第1号、1981年)によれば、北陸学院には女学校創設者メリー・ヘッセルの書簡がまったく保管されていないと指摘し、米国長老教会海外伝道局宛てに送った書簡12通及びトマス・アレキサンダー(Thomas Theron Alexander, 1850年－1902年)とトマス・ウィン(Thomas Clay Winn, 1851年－1931年)の書簡や両氏が述べた言葉を一資料としてヘッセルの女学校設立動機を分析している。つまり、北陸学院には、女学校及び幼稚園の運営に関わった女性宣教師たちの教育観や人間観が分かる資料が極めて少ないと言える<sup>2</sup>。

ライザーについては、召天後に同僚や教え子ら

<sup>\*1</sup> KUMATA, Namiko

北陸学院大学 人間総合学部 幼児児童学科  
乳児保育、保育内容・言葉、幼児理解、保育実習

<sup>\*2</sup> TSUJI, Naoto

北陸学院大学 人間総合学部 幼児児童学科  
教育学概論、教育史、教育方法論

が追悼文として詳しく記した回想録として南信子、ヴァージニア・ディーター編著『おもかげ アイリン・ライザー先生の生涯』（北陸学院短期大学、1970年）、他に小林恵子著『日本の幼児保育につくした宣教師』下巻（キリスト教新聞社、2009年）にライザーの略歴が綴られているが、戦後の内容が中心で、戦前期の活動実態についてはほとんど触れられていない。ライザーの生涯について比較的详细に書かれている高見沢潤子「蠟梅の花 アンナ・アイリン・ライザーの生涯」（『信徒の友』1986年1～3月号）、他にライザーの戦前期における活動記録が残されているキリスト教保育連盟編『ANNUAL REPORT OF THE JAPAN KINDERGARTEN UNION』<sup>3</sup>（日本らいぶらり、1985年、1～6巻）が挙げられるが、ライザーに関する言及は少ない。今回用いるライザー・ファイルでは更に金沢・高岡におけるライザーの詳細な活動を知ることができる。

本研究は、戦前・戦後にわたり、北陸女学校及び附属幼稚園で、キリスト教教育・保育に携わったアイリン・ライザーの史料に着目し、そこに内在する教育・保育観、及び具体的教育内容を明らかにすることを目的とする。さらに、ライザーが北陸学院のキリスト教教育・保育に与えた影響についても考察したい。それは、戦前・戦後に連続したキリスト教教育・保育の要素を解き明かすことにつながると考える。

## 2. 本研究の方法と史料について

本研究で使用する史料の1つは、アメリカ・フィラデルフィアにある長老教会歴史協会所蔵の宣教師個人ファイル（Foreign Missionary Vertical Files）である。同ファイル群には十分に活用されていない宣教師史料が多数保管されており、ライザー・ファイルも北陸学院史において全く活用されてこなかった。

本研究では、まず同ファイル所蔵史料の解読と分析を中心に行う。それにより、第一にライザー自身の個人史を明らかにする。第二にライザーが北陸学院にもたらした教育観、保育観の考察につなげたい。

本研究の史料のライザー・ファイルには、1920年に来日する前から1956年に日本での活動を終える時までに及ぶ報告記録が残されており、学院史等では述べられてこなかった戦前期の具体的な実態が分かるものが含まれている。本研究では、これまで、詳細に描かれていない戦前期のライザーの女子教育・幼児教育の実情を中心に捉えることとしたい。

始めに、ライザー・ファイルを記載年月日と内容により、履歴、来日前（推薦状を含む）、一時帰国期、戦前期、戦時下、戦後、その他に分類した（表1）。（表示「NO.」は、ライザー・ファイル撮影順の頁番号を記載した。）

表1：アイリン・ライザー宣教師ファイル

種類	No.	記載年月日	史料タイトル	備考
履歴	57		MEMORIAL MINUTE	IRENE REISER JAPAN
	58	Jan. 23, 1970	COMMISSION ON ECUMENICAL MISSION AND RELATIONS of THE UNITED PRESBYTERIAN CHURCH IN THE U.S.A	Received Mar. 20, 1925
	127	March 1950	REISER, MISS ANNA IRENE〔履歴〕	Filing Dept. Dec. 15, 1965
	132	日付なし	〔履歴〕	恐らく来日初期のもの Received Mar. 20, 1925
	133	March 1950	REISER, MISS ANNA IRENE	127と同じ史料 Received Mar. 20, 1925
	134～136	Sep. 1, 1959	Missionary Personal〔履歴〕	Received Mar. 20, 1925
	34		Alma College-KindergartenDept. Northwest Board Recommend Ap.and As. West Africa〔略歴〕	Filing Dept. Jan. 7, 1920
来日前	30	Nov. 2, 1915	Dr.White〔宛書簡〕（Sincerely yours Irene Reiser）	Received Nov. 5, 1915
	29	Nov. 10, 1915	〔ライザー宛書簡〕	Filing Dept. Nov. 11, 1915
	28	Jun. 16, 1916	〔ライザー宛書簡〕	Filing Dept. Jul. 6, 1916

アイリン・ライザー宣教師のキリスト教教育

種類	No.	記載年月日	史料タイトル	備考
来日前	27	Sep. 29, 1917	〔ライザー宛書簡〕	Filing Dept. Oct. 2, 1917
	14～16	5. 3, 19	Report of Medical Examiner 〔ライザー健康診断書〕	Received Jun. 30, 1919
	9～12	May. 19, 1919	APPLICATION CONFIDENTIAL MARRIAGE ON THE FIELD	Received Jun. 30, 1919 ライザー回答
	37	May. 19, 1919	A.G.COPELAND INSURANCE	Filing Dept. Jan. 7, 1920
推薦状	38～40	May. 19, 1919	CANDIDATE BLANK FOR WOMEN Confidential Letter Regarding	Received Jun. 30, 1919 To Mr. E. J. Willman
	41～43	May. 21, 1919	CANDIDATE BLANK FOR WOMEN Confidential Letter Regarding	Received Jun. 30, 1919 To Miss. Theresa. A. Clow
	44～46	May. 21, 1919	CANDIDATE BLANK FOR WOMEN Confidential Letter Regarding	Received Jun. 30, 1919 To Dr. A. W. Johnstone
	47～49	Jun. 9, 1919	CANDIDATE BLANK FOR WOMEN Confidential Letter Regarding	Received Jun. 30, 1919 To Mrs. F. R. Hurst
	50～52		CANDIDATE BLANK FOR WOMEN Confidential Letter Regarding	Received Jun. 30, 1919 To Miss. Alice. Temple
	53～55	May. 19, 1919	CANDIDATE BLANK FOR WOMEN Confidential Letter Regarding	Received Jun. 30, 1919 To Miss. Caroline. Parsons
	32	Jun. 27, 1919	Re Miss Reiser Extract from letter to Dr Reed from Frances L.Hughes	
	56	Jun. 30, 1919	Record of Candidates	
	26	Jul. 11, 1919	〔ライザー宛書簡〕	Filing Dept. Jul. 11, 1919
	25	Oct. 4, 1919	Dr.REED 〔宛書簡〕 (Sincerely yours Irene Reiser)	Received Oct. 7, 1919
	24	Jan. 6, 1920	〔ライザー宛書簡〕	Filing Dept. Jan. 8, 1920
	4	Jan. 19, 1920	TO BE FILLED OUT AND RETURNED PERSONAL RECORD 〔ライザー個人調書〕	Received Jan. 30, 1920
	23	Jan. 24, 1920	Dr.REED 〔宛書簡〕 (Sincerely yours Irene Reiser)	Received Jan. 30, 1920
	22	Mar. 16, 1920	〔ライザー宛書簡〕	Filing Dept. Mar. 20, 1920
	21	Mar. 31, 1920	Dr.REED 〔宛書簡〕 (Sincerely yours Irene Reiser)	Received Apr. 5, 1920
	20	April. 7, 1920	〔ライザー宛書簡〕	Filing Dept. April. 8, 1920
	5	Apr. 19, 1920	TO BE FILLED OUT AND RETURNED PERSONAL RECORD	Received Apr 28, 1920
	17～19	6, 5. 20	Report of Medical Examiner 〔ライザー健康診断書〕	Filing Dept. Sep. 8, 1920
	31	Jun. 7, 1920	Re Miss Reiser Extract from letter to Dr.Reed from Frances L.Hughes 〔ライザー宛書簡〕	Filing Dept. Jun. 21, 1920
	33	Jun. 10, 1920	My dear Mr.Speer Miss Reiser to take	Filing Dept. Jun. 11, 1920
一時帰国中	13	日付不明	Statement of christion experience and motions for seeking missionary service	ライザー手書きの申請書
	6	Sep. 22, 1925	〃	〃 Received Sep. 26, 1925
	7	Mar. 25, 1932	PERSONAL RECORD BLANK OF FURLOUGHED MISSIONARIES TO BE FILLED OUT AND RETURNED	〃 Received Mar. 31, 1932
	8	Aug. 19, 1939	〃	〃 Received Aug. 23, 1939
	35～36	Mar. 5, 1930	Agreement to Participate in Service Pension Plan 〔ライザー同意書〕	Apr. 26, 1930
戦前期	131	Dec. 24, 1924	〔ライザー報告書〕	
	130	Dec. 19, 1926	〔ライザー報告書〕	
	128～129	Mar. 24, 1927	The Fortieth Anniversary Celebration 〔ライザー報告書〕	(日付は保管された日)
	125～126	Oct. 23, 1927	〔ライザー北陸女学校報告書〕	Filing Dept. Dec. 15, 1965
	123～124	June 20, 1928	〔ライザー北陸女学校報告書〕	Filing Dept. Dec. 15, 1965

種類	No.	記載年月日	史料タイトル	備考
戦前期	121～122	Dec. 20, 1928	〔ライザー報告書〕	Filing Dept. Dec. 15, 1965
	119～120	May 1929	〔ライザー報告書〕	Filing Dept. Dec. 15, 1965
	117～118	Summer of 1929	〔ライザー報告書〕	Filing Dept. Dec. 15, 1965
	115～116	Mar. 11, 1930	〔ライザー北陸女学校報告書〕	Filing Dept. Dec. 15, 1965
	113～114	Sep. 5, 1930	〔ライザー北陸女学校報告書〕	Filing Dept. Dec. 15, 1965
	110～112	Jan. 1931	〔ライザー報告書〕	Filing Dept. Dec. 15, 1965
	108～109	Oct. 1, 1931	THREE STORY PAPERS By Irene Reiser 〔ライザー北陸女学校報告書〕	Received Jan. 1931
	106～107	Sep. 19, 1932	〔ライザー北陸女学校報告書〕	Filing Dept. Dec. 15, 1965
	104～105	Jan. 8, 1933	〔ライザー北陸女学校報告書〕	Filing Dept. Dec. 15, 1965
	102～103	Oct. 17, 1933	〔ライザー北陸女学校報告書〕	Filing Dept. Dec. 15, 1965
	101	Mar. 22, 1934	〔ライザー北陸女学校報告書〕	Filing Dept. Dec. 15, 1965
	99～100	Jan. 12, 1935	〔ライザー北陸女学校報告書〕	Filing Dept. Dec. 15, 1965
	98	March 1936	Station Letter (Celebration Anniversaries, Honoring the Teachers, A Story Club Celebrates)	Filing Dept. Dec. 15, 1965 ライザー署名あり
	97	Jan. 20, 1937	〔ライザー北陸女学校報告書〕	Filing Dept. Dec. 15, 1965
	96	Jan. 12, 1936	〔ライザー北陸女学校報告書〕	Filing Dept. Dec. 15, 1965
	93～95	日付なし	An Appraisal Annual Report for1937 〔ライザー報告書〕	Filing Dept. Dec. 15, 1965
	91	Jan. 14, 1939	〔ライザー北陸女学校報告〕	Filing Dept. Dec. 15, 1965
戦時下	90	June 16, 1944	The Presbyterian Board of Foreign Missions 〔ライザーのグラナダ収容所（アマチ）報告〕	Filing Dept. Dec. 15, 1965
戦後	61～62	Feb. 16, 1947	The Presbyterian Board of Foreign Missions 〔ライザーからの報告書〕	Filing Dept. Sep. 1, 1959
	88～89	Nov. 24, 1949	Hokuriku Gakuin, Kanazawa Japan (報告書)	Received Dec. 9, 1949 ライザーからの報告書、字かすれ
	84～85	Apr. 6, 1951	Presbyterian Foreign Missions and Overseas Interchurch Service 〔ライザーからの報告書〕	Filing Dept. Dec. 15, 1965
	86～87	Apr. 6, 1951	内容は84～85と同じ	Received Apr. 18, 1954
	80～81	Nov. 16, 1951	Presbyterian Foreign Missions and Overseas Interchurch Service 〔ライザーからの報告書〕	Filing Dept. Dec. 15, 1965
	82～83	Nov. 16, 1951	内容は80～81と同じ	Received Dec. 17, 1951 印字薄い
	76～77	Oct. 3, 1952	Presbyterian Foreign Missions and Overseas Interchurch Service 〔ライザーからの報告書〕	Filing Dept. Dec. 15, 1965
	78～79	Oct. 3, 1952	内容は75～76と同じ	Received Oct. 10, 1952
	70～75	May 1953	Friendship Frontier Kanazawa Japan (表紙)	Filing Dept. Sep. 11959、冊子
	71	続き	Letter from Kanazawa, Kindergarten Children at Hokuriku	
	72	続き	School Days	写真
	73	続き	Meet Emiko***A Prize Winner	
	74	続き	TAKEMI MUKOYAMA	
	75	続き	Mark the things you may see in Japan and USA with an X (裏表紙)	
	68～69	Feb. 22, 1954	Hokuriku Gakuin Kanazawa, Japan	Received Mar. 2, 1954 ライザーからの報告書
	66～67	Feb. 22, 1954	PRESBYTERIAN FOREIGN MISSIONS AND OVERSEAS INTERCHURCH SERVULISE	Received Dec. 15, 1965 ライザーからの報告書

種類	No.	記載年月日	史料タイトル	備考
戦後	63～64	Apr. 12, 1955	PRESBYTERIAN FOREIGN MISSIONS AND OVERSEAS INTERCHURCH SERVULISE1954Report	Received May. 2, 1955 ライザーからの報告書
	65	Apr. 12, 1955	〃（手書き）	Received Apr. 12, 1955 ライザーからの報告書
	59	August. 1957	〔ライザー報告書〕	Filing Dept. Dec. 15, 1965 Miss A Irene Reiser Kanazawa, Japan
	60	August. 1957	Missionary Profile	Filing Dept. Dec. 15, 1965 Miss A Irene Reiser
その他	1		Notice to Researcher	フォルダ表紙
	2		写真（ライザー）	
	3	Jun. 30, 1919	RECEIVED Dr.White（写真の裏書き）	Filing Dept. Sep. Jan. 7, 1920
	92		Cross Reference Sheet	

米国長老教会歴史協会所蔵のライザー宣教師個人ファイル（Foreign Missionary Vertical Files）より

### 3. アイリン・ライザーの略歴

まず、表1に示したライザー・ファイルの中で、ライザーの履歴について記されている事項を整理し、ライザーの生涯の全体像を概観することにした。史料は、ほぼ英文であるため、以下本稿で引用する場合は全て筆者らの私訳による<sup>4</sup>（（ ）内は記述当時のライザーの年齢、[ ]の数字は表1史料引用頁番号を示す）。

#### 3-1. 生い立ちと来日まで

アイリン・ライザーは、1891年1月22日、ミシガン州グレイリングで生まれ、キャデラックでクリスチアンの家庭に育った<sup>5</sup>。12歳の時から、アルマカレッジに進むまで、両親の所属教会であったミシガン州キャデラック第1長老教会の活動に参加し、日曜学校、エンデバー教会のキリスト教奉仕活動や宣教師の世話をするなど、活動的な少女期を過ごした。[57・127]

1909年、ミシガン州キャデラック高校を卒業し、ミシガン州アルマカレッジ幼児教育学科（部門）に入学、幼稚園教育を専攻し、1911年に卒業した（20歳）。当時、アメリカでは幼児教育がより発展していく中、卒業後は幼稚園及び小学校（担当1年生）の教諭として8年間働いた。

ライザーにとって学生時代及び教師時代は、宣教師として海外に使わされることに夢を見て、その思いを確かにする時であった。「アルマカレッジ在学中、何年もの間持ち続けてきた宣教活動の仕事への思いが明確な目的（幼児教育分野を海外の自分自身の仕事とするため）となった[127]」。

「教育に携わってきた数年間は、外国宣教活動の準備となった[57]」と振り返って述べている。

その後、1918年、ライザーは、シカゴ大学において、1年間のスーパーバイザーコース（幼稚園教諭指導（監督）コース）で学び、幼稚園の園長になるための資格であるスーパーバイザーを取得、1920年に28歳で宣教師として日本へ派遣されることが決まり、ライザーの願いであった外国伝道の一步を踏み出したのである。[57・58]

#### 3-2. 日本の宣教師としての取り組み(戦前期)

ライザーは、1920年1月5日、米国長老教会海外伝道局より日本の宣教師として任命され、4月5日、日本のミッションスクールで働くように割り当てられた。同年8月26日に日本へ向けて出航し、9月6日横浜に到着した（29歳）。[127]

来日後一年間は、東京の日本語学校で語学学習に費やし、米国長老教会宣教会議において、日本最古の幼稚園がある金沢に派遣が決定し、金沢での年間を通した宣教活動が開始された<sup>6</sup>。

ライザーは、1921年9月16日に北陸女学校の教師及び北陸女学校附属幼稚園園長として着任した<sup>7</sup>。ライザーは、北陸女学校附属幼稚園であった金沢の幼稚園（現在の北陸学院第一幼稚園）と高岡の幼稚園（現在の坂ノ下保育園）の指導を行っていた。ライザーは、金沢から30マイル離れた高岡の幼稚園に毎週木曜日に通い、高岡では高校や大学生のためにバイブルクラス、子どものことを研究する母親のグループを組織し、毎週、金沢と高岡を行き来し働いた（30歳）。[58]



着任後、1921年から何年もの間、ライザーは2つの幼稚園の責任を担っていただけでなく、北陸女学校における教育及び母親の会、子どものことを研究する会や卒業生グループ、さらに女子工場の労働者のために聖書のクラスをひらくなど、伝道を発展させていった。[57]

ライザーが北陸学院に着任した時には、幼稚園設立から40年の歴史があり、多くの卒業生たちが遠近に滞在していた。彼らの中には、幼稚園の教師になる準備のための養成学校に通う学生、クリスチャンの若い男性医学大学生、中学生及び高校生、それよりも小さい卒業生（小学生）で、さらに自分の家庭を持っている人もいた。[132]

1924年から1925年度の北陸女学校の幼稚園は、園児が60名の定員数に満たし運営することができ、当時の状況をライザーは次のように綴っている。「北陸地方は、熱心な仏教徒の人々が多いけれども、私たちの幼稚園の価値が認められ、仏教の学校より優先して、子どもたちが通っている。年始めの教師総会に出席した小学校の先生は、翌日の教師会議で幼稚園教諭の子どもに対して高い理想を持っていることに賞賛した。」と言う。戦前期の幼稚園の営みが盛んである様子を報告している(33歳)。[132]

また、ライザーは、北陸女学校では「英語」と「聖書」と「料理」<sup>8</sup>を教え、女子のバイブルクラスを担当し、卒業生の会の世話では聖書の物語・賛美歌・ゲームなど、様々な取り組みを試みた。ところが、ライザーは1925年8月19日から1926年8月26日まで一年間休暇のため一時帰国しキャデラックの家に戻る。1926年12月に再び金沢に戻った当時を振り返り次のように述べている。「私は日本に戻って来てからももちろん、すぐ仕事に戻り、時間が足りないほど忙しく過ごしています。バイブルクラスと幼稚園の両方とも発展しています。最近、私は幼稚園の卒業生のために新しいクラスを開始し、面白いです。メンバーには、高校を卒業した独身の明るく、魅力的な女の子がいて、私は彼女らと一緒に過ごすことをとても楽しんでいきます。彼女らは子どもの研究に真面目に取り組み、私は彼女らがクリスチャンになることを切に願っています」と言う。女学校と幼稚園の働きに戻り続けられる喜びや意欲が表われている。[132]

1926年には、金沢の幼稚園の創立四十周年の記念式を行った。金沢では、卒園生の会や母の会の活動も行い、当時の園児数は、金沢115名、高岡70名であったことが報告されている（35歳）。

ライザーは、その他にも幼稚園の取り組みとして、1928年から、子どものためにミルク配布を開始し、牛乳は人々にとってさらに健康へ導く有益なものであるという、あらたな健康対策を強調した取り組みを行った。さらに幼稚園では日曜学校を開設し、幼稚園の一日のプログラムと関連づけて行った。また、地域でも日曜学校を開き、伝道が困難とされる北陸の地において、ライザーの宣教活動が発展していった。具体的活動や実情については後述する（37歳）。[58・127]

ライザーは、女学校及び幼稚園が夏季休業中は主に、仙台にある高山国際村で静養した。1928年の夏の休暇は、高山でシカゴ大学の通信教育の学習に励んでいたことが報告されている。ライザーが、日本に滞在中もシカゴ大学で学び続けていたことは、これまで知られていなかったことである<sup>9</sup>。[122・123]

その後（1929年）、金沢の地域には仏教の幼稚園が増え、また伝染病の流行により、金沢の幼稚園の入園者が減少したため、ライザーは、保育料の値上げを行った。当時のことをライザーは、「幼児教育は贅沢と受け取られていたが、そのような状況の中でも幼稚園の教師たちは、地元新聞紙でよい働きと良い評判で取り上げられるほど指導しています。教師は、皆クリスチャンで宗教的基盤を子どもたちに与えることを目的とし、幼稚園のすべてのプログラムに宗教的教えが浸透しています」と困難な社会状況の中でも幼稚園教育で大事にしていることを述べている(38歳)。[117～120]

その後、ライザーは一時休暇となり帰国することになった。1932年1月20日から1932年7月20日まで当初は6ヵ月休暇予定を1ヵ月延長の許可を得て、1932年8月20日サンフランシスコより出航し北陸に戻ったのである（41歳）。[134]

1937年、金沢の幼稚園は、北陸女学校の部門となり、女学校教育の一環として行うこととなり、金沢の園児60名、高岡の園児30名程であった。[127]

また、同年9月、高岡の幼稚園設立25周年行事

では、保護者と卒業生より記念品としてピアノが贈呈され、金沢の幼稚園では50周年記念募金より、台所の備え付けを行い再建築していたことが報告されている（46歳）。[93～95]

さらに、ライザーは、高岡の幼稚園に毎週木曜日に続けて訪問し、母親を呼び集めた会や、高校や大学の学生の若い男性のためのバイブルクラスを行ってきたことで、人々との交流が深まり発展していった。

戦前期におけるライザーの宣教活動では、女学校と幼稚園の営みに関連しながら、母親の会があり、その他にも幼稚園卒業生の料理教室、さらに後に続く卒業生のための日曜学校やバイブルクラスを持っていたことが特徴的である。[127]

### 3－3．戦時下の帰国

ライザーは、1939年7月16日から1940年8月12日まで12か月間の休暇となる。

その後、一時的に金沢に戻るが<sup>10</sup>、戦時下に入り、ライザーは、アメリカ国務省の助言によって、1941年に避難者として米国に帰った。戦時中休暇を延長し1946年に復帰するまで期間は、ライザーにとって、親しみ深い日本から離れて過ごす長い休暇となった。[58]

1941年4月10日午前に着、それから数ヶ月間、ミシガン州キャデラックに居る両親の要望で自宅に残り過ごした。ライザーの宣教奉仕は、1941年11月1日から1942年4月1日まで、中止となったのである（51歳）。[134]

しかし、ライザーは、1942年12月4日から1943年3月31日まで、コロラド州グラナダの日本人収容所における主要な教師として働くことになる。[127]

ライザーは、一時的な日本人収容所の教師に転任することを受け入れ、その地位として、\$ 1,620の年俸を受け取るようになった。その後、1943年11月15日コロラド州グラナダ収容所の移転センターは閉鎖されたことが報告されている。

その後のライザーは、戦後1945年10月1日から北陸での更なる活動に戻るまでの間、ユタ州オグデンの日本人移住地域につかわされることになった（54歳）。[134]

### 3－4．北陸女学校と幼稚園の運営（戦後）

ユタ州オグデンの日本人移住地域の奉仕活動より一年後、ライザーは、1946年10月2日バンクーバーより出航し、北陸女学校と幼稚園の校長として中等教育及び幼稚園教師養成と、北陸女学校における全ての教育計画を運営するために金沢に戻った（55歳）。[58・127]

ところが、ライザーは、1950年2月16日に、COC（日本内外協力会）<sup>11</sup>の要求により1950年4月1日から10カ月の休暇を受ける許可を得て、一時帰国することになった。ライザーにとっては、北陸女学校の建築及び運営資金を得るための休暇であった（59歳）。[134]

さらに、1950年4月1日から3年6カ月の間、北陸女学校建築（戦後の北陸学院保育短期大学）と学校運営貢献のための資金調達を目的としたライザーの休暇（時間）が承認された。米国に帰国したライザーは親しい人を手がかりに、北陸女学校の建築及び運営のために、女性団体の事業で資金を溜めたのであった。[57・127]

ライザーの資金集めは、1950年4月5日帰国から約一年間続き、1951年3月9日サンフランシスコより出航し金沢に戻ったのであった。

ライザーは、北陸女学校のために資金を得た時の思いを次のように綴っている。「何よりも、偉大な喜びの1つは、短期大学開学のために米国長老教会の女性部の組織から受けた資金\$ 200,000.の提供によって、北陸に新しく建物が完成したことです。」と言う。戦前期の営みが続けられ、女学校が発展することは、ライザーにとって大きな喜びであった。

また、ライザーの働きの割り当てとして、1951年11月7日、100ドルが認められたことが報告されている。[134]

1952年に行われた献堂式で、ライザーは、さらに次のように述べている。「1952年に行なわれた教室と礼拝堂と講堂のための4つの建物の献堂式は喜びと感謝のセレモニーでした。賀川豊彦先生の出席はハイライトの1つでした」。北陸学院のために身を捧げるようなライザーの姿勢が伺える（61歳）。[57]

さらに、ライザーは、日本で礼拝（祈り）のラジオ番組に出演し、他の学校や団体では頻繁に講

演を行い、若い日本人についての魅力的な小説『盆栽の松』を著作したこと等、日本におけるライザーの功績が認められ、1955年5月16日、「ミス・ライザーは、勲五等瑞宝章を授与された。」のである(64歳)。<sup>[57・58・134]</sup>

### 3-5. 隠退後は故郷へ

ライザーは、北陸学院における35年間という長い宣教活動にピリオドを打ち、1955年11月21日、米国に戻り宣教師を隠退した(64歳)。<sup>[134]</sup>その後1956年1月22日、ライザーの65回目の誕生日には、年金規定による35年間に基づいた、5か月分及び、奉仕宣教年金・サービス年金\$566.82、社会保障\$942.00、計\$1,508.82が決まり授与された(65歳)。<sup>[136]</sup>

晩年ライザーは、故郷であるミシガン州キャデラックにある妹ミセス・ポール・メイプスの家で過ごし、教会や社会奉仕の活動に参加した。その後、白血病を発症し、1969年12月14日、天にいる主のもとへと召され78歳の生涯を閉じた。ライザーの二人の姉妹と日本や米国にいるライザーの多くの友人らは、日米間の友好関係を結びキリストの奉仕に献身したライザーの人生に神への感謝の挨拶を伝え合った。<sup>[57]</sup>

ライザー・ファイルにある「履歴」を基に、アイリン・ライザーの生涯を全体的に描いた。おおよそ、学院史等で語られてきたことと同様に、ライザーの戦前から戦後の北陸女学校及び幼稚園における働き、特に戦後の北陸学院保育短期大学創設では資金集めに尽くしその後の運営に携り重要な役割をなし得たことは確かである。

しかし、ライザーが、どのような思いを抱き、北陸学院のために資金調達し、幼児のための様々な活動や保護者や卒業生らのバイブルクラス等に取り組んだのであろうか。これまで、ライザーについては戦後の活動を中心に注目されてきたが、戦前期の営みが戦後につながる内容であったことは、前述したライザーの戦前期の幼稚園や女学校におけるライザーの姿勢や取り組みの内容から伺える。

また、戦時下では、単に避難者として帰国したのではなく、米国における日系人収容所において

日本人に対する支援活動を行っており、ライザーの生涯を通して、日本人の存在は身近で大切であったと考えられる。

特に戦前期における北陸で関わった幼児、女子生徒、保護者、地域の人々らとの出会いは、戦後ライザーが日本に戻って宣教活動が続ける上で、重要な意味があったのではなかろうか。だとすれば、戦前期に行っていたライザーの宣教活動を明らかにしておくべきであろう。

本研究で用いる史料のうち、表1に示したなかでも、ライザー自身が抱いた1人1人に対する願いや喜び等が詳細に記述されているのが次に用いる「ライザー・レポート」(ライザーが米国長老教会海外伝道局に報告してものを指す：表1備考欄報告書等)である。

「ライザー・レポート」には、これまで述べられていない戦前期の女子学生や園児の具体的な様子をライザー自身の言葉で丁寧に記録しているものが多く含まれる。そのため、「ライザー・レポート」を用いて、女学校及び幼稚園における具体的な教育内容、及び北陸の地における宣教活動等の実態を示し、そこに内在するライザーのキリスト教教育観やライザーを取り巻く人々の思い等にも触れておきたい。今回の研究では、史料の量と内容の実態を考慮し、戦前期に焦点を置き、ライザーの女子教育と幼児教育の活動を中心に捉えることとした。

### 4. 女子教育と幼児教育の具体的活動

戦前期における「ライザー・レポート」の報告事項では、ライザーの宣教活動についておおまかに分類すると、北陸女学校における女子教育、金沢・高岡の幼稚園の監督指導、日曜学校やバイブルクラス等の活動、ライザー個人活動、その他の活動や庶民との出会い、となる。本研究では、ライザーの女子教育、幼児教育に関する活動の実態から、ライザーのキリスト教教育の展開を把握したい([ ]内に示した数字は、引用するライザー・レポートの表1頁番号及び記述日付である)。

まず、ライザーが北陸に着任した当初の報告[史料131：1924年12月24日]によれば、金沢の幼稚園で初めて迎えるクリスマスに関するエピソードが綴られている。これから取り上げていく詳細な



エピソード記録がライザー・レポートの特徴である。例えば、子どもたちが用意したクリスマスのプレゼントの内容については、「母親宛てに作成した贈り物の内容にまつわる子どもたちの願いや考えを含めたプロセス」まで詳細に描き、幼稚園でのクリスマス祝会の様子では、「ツリーを見て感激した子どもたちの動きや表情、聖誕劇で羊役の子たちが寝てしまって可愛らしい」と具体的に様子を示す等、1つ1つの活動について表面的な出来事としてではなく、そこに内在する気持ちや考えが表われてくるような記し方である。ライザーが子どもの思いに寄り添い共感していたと言える。

次に略歴にあるように、米国に一時帰国し日本に戻った折に記した報告[130：1926年12月19日]では、「幼稚園の卒業生の聖書クラスの担当メンバーは、女学校を卒業した若い明るく魅力的な女子たちで、彼女らはクリスチャンになることを願っています」、「天皇の深刻な病気のため、教会や幼稚園ではクリスマスを祝う計画を変更したが、子どもたちをがっかりさせないために、贈り物やケーキは与える予定です」とあるように、ライザーが女学生や幼児たちに思いを寄せ、その上で自身の願いを含み報告していることが分かる。

次に、戦前期の北陸女学校と幼稚園の行事についても詳細に様子を述べている。四十周年記念と金沢及び高岡の幼稚園と女学校の現状の報告によれば、

金沢の幼稚園の創立四十周年のお祝いを長い間楽しみにして迎えました。幼稚園の卒業記念品のピアノと楽器演奏で盛大に祝いました。ゲストの宣教師ミス・ポーター（*Francis E. Porter*, 1859－1939）とアシスタントの日本人女性ミセス春日によるスピーチ、その後歌と祈りをしました。ピアノ伴奏で幼稚園の子どもたちの歌やゲームもしました。幼稚園のために長年働いたミス・ポーターは二日間滞在し、卒業生の会や母の会に参加し、幼稚園の規模が大きくなったことをとても喜んでいました。

金沢の幼稚園は115人、高岡の幼稚園は70人子どもがいて、2つの幼稚園が営まれ、4つ

の日曜学校があります。女学校では、ほぼ400人の生徒がいます。[128・129：1927年2月]

戦前期において女学校及び幼稚園のいずれも、生徒・園児が多く、教育活動の規模の大きさが伺える。これらの実情は学院史では見られない記述であるため、重要な史料であると言えよう。

また、ライザーの特徴的な取り組みの1つである、日米友好の推進支援では、日本人形を贈る等のアメリカとの交流について、次の記述がある。

冬の間に、幼稚園のお母さんたちが立派な日本人形の洋服を作り、その日本人形を支援者であるアメリカのサンデースクールに送りました。その後、アメリカから、とても美しくハンサムで細かく丁寧に作られた人形が贈られてきました。[125・126：1927年10月23日]

幼稚園では、子どもたちは、いつものように聖誕劇の役を喜びながら取り組みました。子どもたちは人形、カード、ハンカチーフ、絵本をアメリカの友だちからもらいとても幸せになり、その様子を見たお母さんたちは喜びました。[97：1937年1月20日]

幼稚園の卒業生である日曜学校の生徒たちは日曜学校がとても好きであり、7年生(中1)の男の子がクリスマスカードをもらったアメリカのサンデースクールの子に宛てた手紙には「私は次の日曜日が待ちきれません」と書いてありました。[93・94・95]

ライザーが日米間における文化交流の活動を行ってきたことは、北陸学院史等では、主にライザーによる人形のやりとりに注目されていた。しかし、上記のライザー・レポートによると、実際には日本とアメリカの子ども同士の交流によって喜びや嬉しさが見出され、また日本のお母さんたちの思いも込められ、日米間の外交摩擦が強まる中であったにもかかわらず、両国の親睦がより進展していったことが分かる。特に、幼稚園を卒業した子どもたちが、継続して日曜学校に通い交流があったことも、ライザーのキリスト教教育活動として、

特記しておくべき事項である。これらの営みが、ライザーの北陸における宣教活動の基盤となって発展していったのであろう。

また、ライザーの略歴でも触れてきたが、幼稚園における健康推進活動についても同様に、具体的に実情を確かめておきたい。ライザーは、1928年に牛乳の提供を取り入れて幼稚園の子どもたちの健康促進を強調した教育活動を展開した。その実際の記録は、以下のライザー・レポートの報告内容から具体的に読み取ることができる。

今年の母の集いでは、健康について強調しました。子どもの健康診断について提示し、29人のお母さんたちがミルクを飲ませることについて同意してくださいました。ミルク提供は新しい取り組みとして、新聞に長い記事として掲載されました。[123・124：1928年6月20日]

翌年、ライザーは振り返り、1年経過した様子を詳細に述べている。

昨年、幼稚園では健康活動を強調しました。健康推進活動に興味あるアメリカの友人から送ってもらったパンフレット・ポスターがとても役に立ちました。金沢は日本の中で二番目に死亡率が高い地域で、健康に留意が特に必要なため、4年生が、健康な地域になるための（電車が走っている）ポスターを作成しました。その貨物列車には健康食品を載せて、客室には頬の赤い元気な子が乗っています。子どもたちは、健康列車に乗りたい思いがあり、3時前におやつを食べたら、健康列車に乗れなくなるというほどになっています。

金沢の幼稚園では毎日牛乳を飲むこと推進し、お母さんたちが一日分のミルク代を払っています。5月と11月の健康診断ではミルクを飲んでいる子は、健康であることが分かりました。健康に関する講演（医師による「乳児のためのお話」）を母の会で行います。[119・120：1929年5月受領]

幼稚園の母の集いでは、子どもたちの健康に

関する活動を（乳児の診療、料理・調理について、）行い、女学校では、子どもにふさわしい料理について教えています。女学生たちが結婚子どもを授かった時のための食事のレシピや献立表を配りました。女学校でも幼稚園でも今年は、健康を重視し標語としました。[117・118：1929年夏]

当時の北陸金沢の地域の死亡率及び保健衛生状況から健康推進活動を重視したことが分かる。健康の強調については、幼稚園独自の活動としてではなく、女学校の生徒も一緒にポスターを作る等健康推進活動に参加したり、料理について学んだりしていた事実が明らかになった。ただ単に、当時の北陸地域の学校における最初の取り組みとして持ち込んだではなく、ライザーにとっては、北陸地方の人々が皆健康に幸せに暮らすことを切に願いその思いから導き出した取り組みの1つであったと考えられる。

一方で、ライザーは女学校の役割を、家庭を支える良き夫人の育成（良妻賢母教育）と捉えていたのだろうか。その点は今後の課題としたい。

以上、いくつか女子教育及び幼児教育の具体的な活動を取り上げてきたが、これらの数々の報告より、ライザーが戦前期から、金沢と高岡の幼稚園と北陸女学校を中心とした北陸地方の人たちと出会い、その後もつながりを持っていたことが分かる。また、ライザー・レポートは、戦前期、特に戦争直前当時の社会背景を知る上でも重要な史料であると言える。

次に、ライザーが幼児教育及び女子教育を営む上で、北陸地方の人たちがどのようにイエス・キリストと出会っていくのか、それをライザーはどのような目で捉えていたのか、ライザーのキリスト教教育の実態について明らかにしておく。

## 5. ライザーのまなざし

まず、ライザーは、幼児教育及び幼児のことをどのように捉えていたのか、ライザー自身が綴った内容から考察したい。ライザーは幼稚園教育について次のように述べている。

「幼稚園の営みが子どもに対する伝道の間（目

的)である」。[125・126：1927年10月23日]

ライザーにとっては、幼稚園における営みそのものが伝道であり、目的であると言う。実際にはどのように捉えていたのか、ライザーの視点については、以下の報告から言えよう。

幼稚園のお母さんたちがキリスト教に興味を持ち、クリスチャンになることを求めましたが、彼女らの母親が反対しているので、信仰告白が妨げられないよう、私は祈っていました。そして、彼女たちはクリスチャンになると決心し、答えました。[125・126：1927年10月23日]

幼稚園のお母さんのバイブルクラスを毎週金曜日に行い、7人が聖書に興味を持ったので、教会に来ることを祈り願っています。その内お父さんの1人が教会に通い始めました。[123・124：1928年6月20日]

金沢・高岡のいずれも幼稚園の先生たちは全員クリスチャンで、クリスチャンとして、宗教的基盤を子どもたちに与えることを目的としています。多くの御言葉・数え切れない程のお話を聴かせたり演じたりしています。[119・120：1929年5月受領]

幼稚園を卒園した日曜学校の高校生の女の子らが「もっと神様について学びたいです」と書いて、そのうち4人が洗礼を受け5人が教会に通っています。[93・94・95]

お母さんたちと幼稚園の先生たちのバイブルクラスを行い、5人の女性がキリスト教に興味を示しました。1人の夫は、自分の家庭に集まることを提案し、教会にも来ています。[119・120：1929年5月受領]

お母さんたちのバイブルクラスは1年間続いています。子どものバイブルクラスでは、英語を勉強したり、菊クラブ(というサークル)では讃美歌を歌ったりしました。また、バザー

のためのエプロン作りにも取り組んでいます。[117・118：1929年夏]

まりこちゃんが風邪で幼稚園を数日お休みしました。ベッドから出たいまりこちゃん、お母さんにはもう少し辛抱するようと言われました。そこに、「ごめんください」と先生が植物ときれいな絵を持って来てくれました。お父さんはそこに書いてある英語が読めるから聞かせてくれるでしょう。と先生は言っていましたよ。まりこちゃんは絵に興味深く見ました。それは放蕩息子の聖画でした。イエスさまはこの男の子を愛しているでしょう。[110・111・112：1931年1月受領]

週に一度の年長組の集まりは、私とヴァナケン宣教師(Miss VanAken)が担当する小さな村での日曜学校です。(その後一度なくなるが、日本人の先生が行う。)YMCAの場所が与えられ、週1回幼稚園の道具を持って来て、非公式の幼稚園を1時間ほど行っています。子どもたちは始め恥ずかしそうにして中に入るのを拒む様子で、それをいつもお母さんお父さんおばあさんらが覗き込んでいます。[108・109：1931年10月1日]

夏休み期間の小学生による作品展覧会では、金沢の幼稚園を卒園した2人の作品が代表となりました。その他、卒園生たちは、学業において成績が高いと聴いています。園児全員、今も続けている朝のサークルで学んだ聖書箇所の暗唱レパトリーがたくさんあります。彼らは、木や美しいものは、すべて神さまイエスさまにつながって属していると思っています、彼らが、「イエスさま」、と呼ぶ時は本当にリアルです。お母さんたちは、家族みんなが祈りに加えられますように熱心に祈っています。「お父さんがよくなりますように」、「明日のピクニックが良い日になりますように」、「神さまに食事の感謝」、というように子どもたちが家族のことを思って主張し願い祈ることに感謝しています。幼稚園の日曜学校では、



子どもたちのクリスチャン生活がより深まっています。[93・94・95]

幼稚園を卒園した中等学校の男子のための聖書と英語クラスは少ないけれど毎回出席があります。かつて園児でつながりのある高校卒業生のための料理と聖書のクラスは月に2回、私の家に集まります。幼稚園の先生たちによる他の場所で行っている一日幼稚園も続いていて、園児より年上の子の日曜学校があります。お兄さんお姉さんたちが小さい子どもたちと一緒に歌ったり遊んだりしている日曜学校です。田舎の道端での日曜学校と川べりでの日曜学校の活動も続いていて、金沢の幼稚園のキリスト教の感化が広がっています。高岡の先生方は教会の年輩の一人が平日のサンデースクールを開いています。

高岡のお母さん方は母の会に興味はなかったけれども、幼稚園の特別行事や訪問日（参観日）には、みんな一緒になって出席しています。

金沢では、幼稚園のお母さんの約3分の1が毎月の集会に集まり、その内11人は女学校の中澤校長（中澤正七、1870-1944）が教えるバイブルクラスに出席しています。結果として、ある1人がクリスマス礼拝に洗礼を受けました。約この一年ほどの間、私は、病気の園児にカードを送りました。彼らが休んだ時に、お花を持って、日曜学校の絵を持って、お母さんには週刊「神の国」を持って、立ち寄ったりしました。私の訪問は歓迎され、相互の友情を深めるよい結果となりました。

[91：1939年1月14日]

幼稚園での営みそのものが伝道となって、母親の会、卒業生の日曜学校、幼稚園の先生たちが始めた一日幼稚園とその日曜学校、他にも道端や川べりでの日曜学校というように様々な活動へと発展していったことが分かる。

ライザー自らが幼稚園において伝道することを意図したというよりかは、ライザーの幼稚園の営みが起点となって、母親や卒業生らの信仰が育まれていったことをライザーは詳細に述べている。

ライザー自身が、子どもや母親らのイエス・キリストと向き合い祈る姿に共感し、常に祈っていたことも分かる。下線部（は筆者による）では、子どもたちが、「イエス様」と呼ぶ時は、本当に実際的に向き合って祈る子どもの姿を尊重し、また、母親らが家族のために祈ることにも心を寄せ、さらに、子どもの内側から湧いてくるような1人1人の祈る願いを受け止めていることが読み取れる。

また、どの園児に対しても、神の愛を持って1人1人に丁寧に着いていたことが、報告の中にある、「まりこちゃん」という固有名詞を用いてまで記述していることから分かる。欠席した園児にも目を向け、自宅を訪問し、聖書の御言葉や聖画を贈り、キリストの愛が生活に浸透することを大事にしていたと伺える。

ライザーが幼稚園教育を通して発展した活動には、聖書や讃美歌に親しみ、また1人1人の思いに共感するライザーのまなざしがあった。それが、人々にとってイエス・キリストとの出会いの場へとなったのであろう。

そのようなライザーのまなざしは、女学校のなかでも同様に、丁寧に向き合い、生徒ら自ら湧き起る素直な信仰を受け止めていたことが記録から分かる。また、卒業生のバイブルクラスや寮生の指導を行っていた報告も多数見られる。

ライザーは、女学生1人1人に対しても感情を素直に表すありのままの様子を捉え、特に女子生徒の信仰の成長を大事にしていたことが以下の報告から読み取れる。

マイルス宣教師（Mary Miles, 1896-1988）が休暇中の間、寮の女子生徒の様子を見ています。時々決まりを守らない女子がいます。しかし、寮の女子22人中21人がクリスチャンになることを約束し、10人が洗礼を受けることを親に願い、そのうち実際に5人の女子が洗礼を受けました。彼女らは、霊的なことに対して驚くほどにとっても率直でした。[125・126：1927年10月23日]

とあるように、ライザーは女学生の素直な信仰を受け止めている。さらに、娘の姿を通して家族



や周りの友人がキリスト教を受け止めていく様子をも大切にしていることが次の報告から言えよう。

昨年洗礼を決意した10人の内、実際には6人の女子が受けました。現在2人が親の許しを求めています。その女子らに関わる人たちも、洗礼を受けたい気持ちにかき立てられています。

女学校卒業生60人を3分の1のグループずつ家に招いて、中澤校長先生による信仰についての話を聴き楽しい時間を過ごしました。同窓会は、1か月に一度集まるクラブを作り、約25人が参加し互いに親しんでいます。[123・124：1928年6月20日]

女学校の卒業生のバイブルクラスを持っています。この前の春、私は、女子たちに宗教教育の現在の様子と、それ以前について質問に答え書いてもらいました。彼女らは、かつて、お寺に訪れた時の話や家にある神棚や仏壇の前でおじぎをすることなどを書きました。早い時からの宗教訓練（儀式）については喜んでしてきましたが、このミッションスクールに来て、本当の意味について新たに分かりました、とその子たちの両親がキリスト教はともよい宗教であると感じていました。

女子たちが自分の家族に対しても、多くの知識を伝えることができるよう、その意味が分かるように努めています。しかし、何人かの親は、娘が洗礼を受けることを拒んでいます。[102・103：1933年10月17日]

ライザーは、女子教育の中でも、1人1人の生徒の素直に応じる姿を尊重し、何よりも信仰につながることを願っていたのであろう。

以上、幼児教育及び女子教育を通したライザーのまなざしを捉えてみた。ライザーは目の前にいる人、子ども、保護者、女子生徒、卒業生等それぞれの目線に立って、1人1人の心の内側から湧き出る率直な姿を大事にし、愛を持って接していた。人々は、ライザー自ら醸し出す聖書や讃美歌が浸透したキリスト教的な楽しさ、喜び、時には慰めを味わうことにより、ライザーを深く信頼し

ていったのであろう。何よりもありのままの姿を大事にするライザーのまなざしが彼女のキリスト教教育を支えていたのではなかろうか。

## 6. まとめ

本研究では、米国長老教会宣教師アイリン・ライザーの残した記録の分析を通し、戦前期を中心にライザーのキリスト教教育について検討した。

北陸学院史では触れられていない、ライザーの幼児教育及び女子教育に対する思いや考えについて実態を通して捉えることができた。

ライザーは、戦前期における金沢と高岡の幼稚園及び北陸女学校を中心としたキリスト教教育において、様々な人々との出会いを大事にしていた。そのライザーの姿勢が戦後の宣教活動を継続することにつながっていったのであろう。

ライザーのキリスト教教育において、特徴的なことは、個々人のありのままの姿を共感するまなざしである。幼稚園の子どもがリアルに祈る様子や女学校の生徒が信仰を素直に告白する出来事を生き生きと描いている記録からは、ライザーの教育観が読み取れる。また、幼稚園や女学校の営みを通して、発展した母親の会、卒業生の日曜学校、一日幼稚園や川べりの日曜学校など、様々な活動においても同様に、丁寧に人々を向き合い、内面的な交わりを大事にしていた。

ライザーは、日米間の外交摩擦の高まった頃、日本人形を贈ることやアメリカのサンデースクールと日本の日曜学校の子どもの同士の交流を大事にし、日米親善を率先して推進していた。

1920年の来日当初より、伝道困難とされた北陸地方において、キリスト教教育を根付かせ、戦後に続いていったことは、ライザーの生涯を通して物語っていると言えよう。

本稿で用いたライザー・ファイルは、戦前期から戦後にかけての北陸女学校や幼稚園の様子を知ることができる貴重な史料が含まれていた。

今後の課題点には戦前と戦後の一貫性、相違点など比較し、現代の教育・保育にどうつながっているのか具体的検討をすることが挙げられる。また、本研究における考察で用いたライザー史料からは読み取れない当時の状況が考えられるので、更なる史料の調査が必要と考えられる。

本研究は、北陸学院大学・北陸学院大学短期大学部共同研究費助成「北陸女学校及び附属幼稚園におけるキリスト教教育・保育の研究―戦前・前後のアイリン・ライザー宣教師史料の考察を中心に―」による研究成果の一部である。

〈註〉

- <sup>1</sup> 北陸学院百年史編集委員会編『北陸学院百年史』北陸学院、1990年
- <sup>2</sup> 辻直人「ルーサー・レポート（翻訳）―9代目校長ルーサーの見た北陸女学校（1）1914年～1916年」(北陸学院大学北陸学院大学短期大学部研究紀要第4号、2012年3月)では、北陸学院に現存する宣教師報告7通のうち3通翻訳した。
- <sup>3</sup> 『ANNUAL REPORT OF THE JAPAN KINDERGARTEN UNION』は、J.K.U (JAPAN KINDERGARTEN UNION) という外国人婦人宣教師の幼児教育の活動組織が、毎年発行されていた英文のアニジュアル・レポート（年次報告書）の復刻版のことを示す。キリスト教連盟によって編集され、1907年から1939年までのものを含み、全6巻及び7巻（翻訳・解説・索引）がある。
- <sup>4</sup> 本稿で引用するライザー・ファイルの内容は、ほとんど英文によるタイプ打ち（あるいは手書き）であるため、筆者（熊田・辻）が日本語に訳し判読したものである。本稿では、そのまま引用したもの、内容を要約したもの、中心的な箇所を抜粋したもの、またはその項目のみを用いている。
- <sup>5</sup> 父ジョン、母フランシス、兄ローリー、姉フローレンス、妹カティ、ジョー、家族はアイリンを含み7名であった。兄ローリーは若くして19歳で天に召された。（『おもかげ アイリン・ライザー先生の生涯』2～4頁参照。）
- <sup>6</sup> 前掲『おもかげ アイリン・ライザー先生の生涯』6頁。
- <sup>7</sup> 『北陸学院百年史』によれば、「1912年3月、英和幼稚園は、その名称を北陸女学校附属幼稚園と改めたのである」（290頁）と、そこに至った経緯や附属幼稚園として実際の営みについては記されていない。『おもかげ アイリン・ライザー先生の生涯』では「1937年に、金沢の幼稚園は、北陸女学校の教育の一環として一つの部門となり」（7頁）と述べている。ライザー報告書では「1937年に北陸女学校の部門（附属）となった」

という記録があり、戦後に書いたと思われる「北陸学院履歴書『アイリン・ライザー』」（北陸学院ウイン館所蔵）によれば、「1921年9月1日 金沢市北陸女学校附属幼稚園主事就任」という記載がある。さらに、「J・K・U」では、1922年では「Kanazawa Kindergarten」、1923年では「Hokuriku Girls School Kindergarten, Kanazawa」と示されているため、これらのことから、北陸女学校附属幼稚園の位置づけやライザーの職位就任については、正確に見当できず曖昧であることが指摘でき、内実を明らかにしていくことは今後の課題である。

- <sup>8</sup> ライザー・レポート [93～95] には、「学校での私の働きは、1年生の英語、5年生の西洋料理を教えることである。」と報告している。
- <sup>9</sup> 筆者（辻）によるシカゴ大学史料調査（2016年3月）では、アイリン・ライザーのシカゴ大学成績通知書を発見した。1909年からアルマカレッジで修得した単位科目及び、1918年シカゴ大学でスーパーバイザーコースを修得単位と1926年に開始した通信教育の成績履歴が記録されている。1926年の春から始めた通信教育では、1927年から1930年（英語作文自宅学習クラス）及び1930年から1932年（物語・小説を書くクラス）に履修していたことが分かる。宣教活動中の一時帰国休暇（1925年8月19日から1926年8月26日、1932年1月20日から1932年8月20日）は、ライザーのシカゴ大学通信教育に関連していたと考えられる。
- <sup>10</sup> 「1941年に、在日アメリカ人が、本国に戻る少し前にアイリンは、金沢の日本の警察から尋問の為出頭するようにいわれた。」（『おもかげ』8頁）ことがあった。それに関連した事象（『北陸学院百年史』303～304頁）はあるが、ライザーの名前は挙げられていない。学院史では、ライザーの帰国時等の実情を明らかにしていないことが指摘できる。
- <sup>11</sup> COC とは、IBC（基督教事業連合委員会：戦後日本のキリスト教会及びキリスト教学校の復興を人的財的に援助するために1947年4月に作られた団体）(Interboard Committee for Christian Work in Japan) と日本基督教団と基督教教育同盟会（現：キリスト教学校教育同盟）の三者によるアメリカ諸教派からの援助の配分や更なる必要について話し合う組織のことを示す。